

浄土

1987-8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別扱承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年七月二十五日印刷 昭和六十二年八月一日発行
第五十三卷 八月号





八月の秀句

八月や馬首かがやきて陽が睡る

飯田 龍太

草の戸の残暑といふもきのふけふ

高浜 虚子

家遠しみそ萩つむは孤児か

幸田 露伴

|| 八月号 ||



池の中に蓮華あり。大きな車輪の如し。

——『阿弥陀経』

目次

法話

おぼんとおせがきのころ……北山良祐……(2)

にこにこ法話

ミーちゃんの夏休み……長谷川 岱 潤……(7)

=江戸物語=(7)

江戸の錦絵……細田隆善……(13)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <5>

海と山の狭間で

——木下圭太郎に関する一考察——

……木下隆一……(25)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第38回

不老不死

……寺内大吉……(31)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「にっこうきすげ」 松浦春子画

(話)

おぼんとおせがきのこころ

(法)

きた やま りよう ゆう
北 山 良 祐

(焼津市光心寺住職)



私の町(特に私のお寺の伝統的行事化している)に、お盆の七月十四日、日没から夜にかけて「塔所(達所とも書く)参り」という習慣がある。家族揃ってお墓参りするのである。勿論、自分の家の先祖のお墓にお参りするのであるが、この日のお墓参りの特色は、実はそれ(先祖のお墓参り)お墓参りが終るのではなく、親類・縁者・友人・知己の方々のお墓にも揃ってお墓参りするのである。従って一基のお墓に幾組もの人がお参りされるのである。だから施主が一々知らなくとも、自分の

家のお墓にも大勢の人がお参りして下さるのである。当夜の模様は、正にお墓参りのお祭りといった表現にふさわしい行事になっている。正に日本人の「民」を中心として形成された家・人脈の在り方を表徴しているみたいである。

普段は先祖がないぐらいに思っている別家・分家の新家でも、その夜は本家のお墓にお参りするのである。そして墓前で一声和尚さんにお経を上げてもらうのである。本当に一声なのである。一声でなければ悪いのではな

く一声（一息）位の短かさでないと大変大勢の志望者の願いを充たし切れないからである。

墓域には数人の和尚さんが回向して廻っているが、どの和尚さんの後ろにも幾人もの人が、自分の家のお墓でお経を上げてもらうために行列をつくって順番を待つのである。

私の寺の墓地は整然としていて道路はコンクリートになっているから歩き易い。然し、今お経上げた次の番の人のお墓はその隣りというわけではないし、その通りであることも減多にない。北隅から南の端、極端な時はまた北の隅の方へといかねばならない。順番を待つために並んでいる順序だから、どうしようもない。次の志望者が我が家のお墓へ和尚さんを案向して先頭を歩く、その後についていく和尚さんの後ろには十人余の順番を待つ人の行列、墓域の中は、そのようにして幾組（和尚さんの人数分だけ行列ができる）かの行列が、

あちら、こちらと行き交うのである。無論、当夜は臨時街路灯（水銀灯や投光機も）も設置してあるので墓域は昼間のように明るい、而かもお墓参りの人が自分の家のお墓の前でタイマツを燃やしているので、そのマツヤニの臭いと燃焼の火の照りと臨時灯とで墓域全体異様な雰囲気で一味違った明るさである。正しくお墓（亡者といいたいが）の園遊会風景である。

——そんな不合理な（北の端から南の端、そしてまた北の端といった……）順番を消化していかねばならない、その夜の三時間位の間に和尚さんは恐らくは数キロも歩くことになってしまふのである。

人間の園遊会でも宴タケナワにでもなるとあちこちで一カタマリの大人数・小人数の輪が出来てニギヤカであったり、久闊を述べ合いながら静かに話し合ったり、さては連れもないまま独りで飲み食べして程々に帰ってい

く人等々とあるように、お墓の園遊会も全く同じようで、賑かな、それからそれへとお参りされるお墓もあれば、遠方の人のお墓であろうか、それともお付き合いの少いお宅のお墓か、余りお参りを受けないお墓……といういろある。

その催しのしめつくくりは、午後八時半、鉾を撞きながら全墓域に回向して廻り、どのお墓にも回向のなかったことのないようにして終るのである。正にお盆に於けるクライマックス一大風景といった情景である。

ともあれ、普段はお墓参りなどしたこともない人Ⅱ（先祖がないと思っっている新家の人）も、その夜はお参りに来るのである。墓参に来るのか、墓参のお祭りに来るのか解からないが……どちらでもいいではないか、とに角お墓へ参るのであるから。その間に間にお参りで普段ほとんど先祖との出遇いすらなか

ったその人が、その人の心の中に、お墓参りしている眼前のお墓（ご先祖）のお陰によって今、自分がここに在ると気付く縁が得られたならスバラシイことではないだろうか。それ程はつきり意識せずとも、そのような雰囲気の中に入っていたことが大きな縁が生ずることになるのではなからうか。

お盆は、直接的には、ご先祖のお蔭、自分の現在あることの縁の流れを感じとり、感謝する法会である。

お施餓鬼は、家族の盛り上げ、支えてくれているお蔭、自分の現在あることの横の拡がりを感じとる起因に基づく法会である。

それぞれの起源についての因縁は紙数の制限の故に今は省略する。

お盆は釈尊十大弟子の一人、神通第一の呼称がある目連尊者が母への追孝を通して先祖に合掌することである。

お施餓鬼は釈尊十大弟子の一人、多聞第一の呼称がある阿難尊者が自らの延命を通して自分を生かし支えてくれている森羅万象悉くに感謝の合掌を捧げることである。

共にその宗教的儀礼として、同じように三宝物供養——上は仏薩菩聖衆かち、下は人界から迷界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）の一切の生きとし生けるものみなに供養することによってなされるのである。

その起源はいみじくも共に、万物ことごとくを自分自身ひとり占めしないことであり、仏教の大切な徳目である「布施行」をすすめるのである。

世の中で「布施」の出来ない人はアワレである。釈尊は仏道修行の中で、特に「布施」をすすめられている。

元祖法然上人も他力念仏を通して、生かされる悦び、あなたのお蔭と感謝し、喜ぶこと

を教えられている。

感謝し、喜ぶから、あなたへのご奉仕の心が生ずるのである。奉仕の意は正に「布施の心」である。

お念仏の意は布施の心に通ずる、迎えるお盆の折に、お育てをいただいた親を通してご先祖に、ご先祖を通して過去せる一切の有縁無縁のホトケサマに感恩供養し、殊に無縁仏に永向供食する事はお盆の趣意〓布施のこころを修証することで大切である。従って、お盆の墓参の折には無縁サンにもお参りしたいものである。

お盆の折に、つとめられることの多いお施餓鬼の法会に列坐して、隣りに坐られる人との係り合いを通して、すべての人の支えを感じとって、同時に自分自身も多くの支えとなる心を培うことは、お施餓鬼の意に通ずることであって大切な心得方ではないだろうか。

お盆の折に、お施餓鬼会の折に、普段は、えてして疎遠勝ちな墓参を通して先祖への感恩合掌の心を養いたいものである。と同時に述べきたったように、すべてのものみなのお蔭を感じて三界の有縁無縁＝無縁仏への供食も心がけたいことである。又、同時に、お寺を通して、すべての人達への「施し」の心を育てたいものではある。分り易く具体的にズバリ云うならば、出来る人は出来る限り沢山お寺に布施することであると云うことである。施物が多ければ多い程、法会の内容も深みを加えられるし、会座参列の人達への接待も厚くすることができるようになる。私の寺では「博施袋」という名称の仏餉袋を出していて、これをそれに充てている。そして施餓鬼会の折、参列者に施物者の名の下に施餓鬼団子をもれなく差し上げ喜ばれている。話す人も、施しを受ける人も、そしてその施物自体も喜

ばれるものであれば、所謂、この状態が三輪清浄といって「施し」の最高の状態なのである。そのように運ぶことはお寺の創意であり、努力でもあろうが、要は布施する立場の人が大いにがんばることによって始めて可能なことである。無量寿経に、

施しは棄つるにあらず、更に福を得るを謂う

と示されている。福を得んがために、施しをするのではない。施しをすることが、いや、施しをさせていただくことが、自らの人生を歩む上に於て大切だというごとを知って行ずるのである。それが「お施餓鬼」のころである。

共々に、お盆の起因を、お施餓鬼の意を受けとって日々の生活を歩み、それぞれの人生を悔いなく過したいものである。

ミーちゃんの夏休み



日差しの強い夏の朝、ミーちゃんたち一家は前からの約束通り、夏休みを利用して今年も、お母さんの実家である山形に、みんなで行くことになりました。

「お母さん、今年も裏の山でせみ採りできる

かな」

「そりゃあまだ田舎だもん、せみなんかイヤって程採れるわよ」

「わぁ、楽しみだなあ、このあいだ学校で話しをしたら、せみを見たことがないって子が

はせがわ
長谷川 岱潤
(東京・品川区戒法寺住職)

いたんだよ、笑っちゃったよ、いっぱいって自慢するんだ」

「ミーちゃんたち男の子みたいね、でもさミーちゃんはせみの種類どのくらいわかるの」「えー、あぶらぜみと、みんなんぜみと、あと、つくつくぼうしと、うーんと、わかんないや、それは、えーと、ほんととはどれがどれだかわかんない」

「まあ、だらしない、といっても、実際には東京じゃ見られないものね、無理ないか、せいぜい田舎でせみ採りして、どれがどのせみだかわかるようになってこようね」

「わーい、やった、ミーみんみん」

ミーちゃんは柱にとまって、せみの真似をして喜びました。

福島まで新幹線に乗り、そこから特急に乗り換え、急に山のなかに入ったかと思ったり、じきに山形に着きました。

「お母さん、おじいちゃんたち元気かなあ」
ミーちゃんは少し心配げに聞きました。

「お母さんも久し振りだから心配だけど、この間電話したときは、元気そうだったから、きつとミーちゃんやチーちゃんのこと楽しみにしてると思うわよ」

お母さんはそうは言ったものの少し心配でした。おじいちゃんのぼけが相当進んでいるという話を、おばあちゃんから聞かされていたからです。

しかし、七十を過ぎたばかりの父親が、そんなにぼけてしまっているということを、信じたくないという感情が心の片隅にあり、母親の言葉を鵜呑みにはできなかったのです。

ミーちゃんとチーちゃんが、自分の体ほどもあるリュックを背負いながら、前に行ったり後ろに行ったりしているうちに、お母さんの実家に着きました。

「おじいちゃん、こんにちわ」

縁側に腰掛けていたおじいちゃんを、いち早く見つけてミーちゃんとチーちゃんが駆け寄りながら言いました。

「えーと、お前たちはどこの子だい」

ミーちゃんとチーちゃんはびっくりして、顔を見合わせてしまいました。

「おじいちゃんったらいやね、孫のミーちゃんとチーちゃんですよ」

お母さんがとんできて、すぐ後ろから声をかけました。

「あーあ、よくきたね、田舎に来るのは初めてだろ」

「何を言ってるんですか、毎年来てくれてるじやありませんか、まあいいからいいから、早く玄関からお上がりなさい」

おばあちゃんが溜息混じりに言いました。

ミーちゃんとチーちゃんは少ししゅんとなつてしまいました。

玄関に回るとおばあちゃんが待っていて、ミーちゃんとチーちゃんを抱き上げてくれたので、二人はやつとうれしくなりました。

お父さんとお母さんが挨拶をして、お土産をおじいちゃんに手渡したら、おじいちゃん

もやつと思ひ出してくれたみたいで、顔がにこやになりました。

おばあちゃんが用意してあったすいかを切ってきて、みんなで食べました。話しの話題は何といつてもおじいちゃんのことです。

「この間もゲートボールで毎日会っている向こう隣りのおじいちゃんが来てくれたのに、初めて会う人で知らない人だって言うものだから、私と言ひ争ひしたばかりなのよ。孫の顔も忘れちゃうんじゃ、近所の人なんか覚えられっこないわねえ」

「一年ぶりだからしょうがないんじゃない、歳とれば、誰だって忘れっぽくなるわよ、ミーちゃんたちは気にしないたちだから大丈夫よ」

「そんなこと言っただってお前、孫の顔なんか夢の中だって出てくるものだよ、一年ぶりで会った一言目があれじゃ、ミーちゃんたちがかわいそうでねえ」

「困りましたねえ、それよりお母さんのほう

も少し疲れた顔をしていますよ、体のほう大丈夫なんですか」

それまで黙って話を聞いていたお父さんが初めて言いました。

おばあちゃんは優しい言葉をかけてもらったのが久し振りだったのでしょう。うれしくなって、堰を切ったようにおじいちゃんの話しを始めたので、ミーちゃんとチーちゃんは退屈してしまって外に出ることにしました。

外は夏の日差しがギンギンとさすなか、せみがうるさいように鳴いていました。

「チーちゃん、せみ採りしようよ」

「網と籠は」

「去年使ったのがどっかにあるよ、探してみよう」

裏の物置に行くと、入り口のところにもうちゃんとおばあちゃんが出しておいてくれました。二人は大喜びでそれをとると、すぐ裏の山に向かいました。

「みーんみーんって鳴いているから、これが

みんみんぜみだね」

ミーちゃんは知ったかぶって言いました。

「おねえちゃん、こっちのせみはみんなぜみに似てるのに、かなかなって鳴いてるよ」

チーちゃんが薄暗い木の下から、ミーちゃんに聞きました。ミーちゃんは早くもお手上げです。

「捕まえてお父さんに聞こう」

網と大格闘をしながら、それでも何匹かせみが採れたときでした。大きなくもの巣に掛かったきれいな蝶々を見つけました。

「まあ、かわいいそうに」

ミーちゃんが恐る恐る近づきました。蝶々は羽をばたばたさせていました。ミーちゃんはそっと蝶々の羽をつかみパッと放してあげました。

「おねえちゃん、なんてことするの」

チーちゃんが大声をあげました。

「かわいそうだから、逃がしてあげたんじゃない、何言うのよ」

「だって、くもはどうするのよ、かわいそうじゃない」

「何であんな不気味なくものことなんか言うのよ、蝶々のほうがかわいそうよ」

「くもだって食べられなくて死んじゃったらどうするのよ、どっちが正しいかお父さんに聞いてみよう」

「待ってよ」

ミーちゃんは少し気まずそうにチーちゃんの後を追いました。

「お父さん聞いて、ミーちゃんたらくもの巢から蝶々を逃がしてあげちゃったんだよ、くもがかわいそうだよね」

「だって、とつてもきれいな蝶々だったんだもん、あんまりかわいそうで、ついやっちゃったの、ミーちゃん悪い子なの」

お父さんは、じいっと二人の顔を見ていました。ミーちゃんはもう泣き出しそうでした。チーちゃんは得意まんまんでした。

「ミーちゃんは蝶々が好きなんだよね、その

蝶々、逃がしてあげたら元気よく飛んでいったかい」

「うん、元気に飛んでいったよ」

ミーちゃんがパーと笑顔になって言いました。

「くもはかわいそうじゃないの」

お父さんの思わぬ言葉にびっくりして、チーちゃんが怒ったように叫びました。

「そんなことないよ、くもには気の毒なことだったねえ、せつかくの餌をミーちゃんにとられちゃったもんね」

「だから、おねえちゃんは悪いことしたんでしょ」

「そうかもしれなね、でも蝶々にとってはおねえちゃんは命の恩人だよね」

「でも……」

「チーちゃんの言いたいこともわかるよ、自然のそうした世界に、人間が自分たちの好きだとか嫌いだとかという感情に基づいて、勝手に手を加えていいのか、ということでしょう」

う、でもね、お父さんはミーちゃんの優しい心も大事に育てたいんだ、今度なんかあったときもミーちゃんが、ちゅうちょせずにその優しい心のままに行動できる子であってほしいんだ、わかるな」

「チーちゃんは冷たい心だというの」

「そんなこと言っていないよ、チーちゃんも本当に優しい心の子だと思うよ」

「お父さん、おじいちゃんのことどうします」

お母さんが頭を抱えながら言いました。

「お母さん、失礼かもしれないけどおじいちゃんの子供たちにとって格好の教材じゃないかなって思うんだ、人間っていうのは誰だっ
て必ず歳をとり、そして歳をとれば色々とおかしくなってくる、そういうことを眼の当りに見ることができるんだ、その変わっていく姿をどこまで愛し続けられるか、また愛することが出来なくなったときも、どこまで優しさを持ち続けられるかということ、これは我々にとっての行なんじゃないかな」

お母さんの益々難しい顔になりました。

「行って、どういうこと」

「いまね、ミーちゃんがくもの巣から蝶々を逃がしてあげて問題になったんだよ、蝶々がかわいそうだからって逃がしたりしちゃっていいのかってね、おじいちゃんたちにも同じことが言えると思うんだ、おばあちゃんにはできるだけ優しくしてあげなくてはいけなし、同時におじいちゃんに対して、我々が天敵になってはいけなと思うんだ、おじいちゃんのぼけは直るものではないでしょう、その直らないぼけにたいして、我々はあくまで冷静でいなくてはいけないんだ、力や理屈で対したって何も生れない、蝶々を救うためにくもをいじめているようなものなんじゃないかな、言うは安く、行なうは難しで僕にもなかなか出来ないけど、そうした行ないが自分たちの心を鬼にしないための、正に行なんじゃないかな、頑張ろうよ」

お母さんは静かにうなづきました。

江戸物語

(7)



江戸の錦絵

細^{ほそ}田^だ隆^{りゅう}善^{ぜん}

(俳号・豊明)

ゴッホの「ひまわり」を本年五月、英国競売会社クリステイズが、ロンドンのギャラリーで競売したところ、日本の安田火災が五十三億円で落札した。一点の絵画価格では世界史上最高であった。ゴッホの作品はわが国では大変親しまれ、また画家たちに大きな影響を与えた。ゴッホはピサロやロートレックの影響もあったが、日本の錦絵に強い関心を持ちこれを愛好したものである。ゴッホ独得の表現技法は錦絵を意識した点が多い。

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

ゴッホが模写した錦絵三点がオランダの国立バン・ゴッホ美術館に、保存されており、いずれもそれぞれ日本に



——ゴッホの模写

大はしあたけの夕立

オランダ国立バン・ゴッホ
美術館所蔵——



——広重画「名所江戸百景」

大はしあたけの夕立——

おいて公開されたことがある。その三点は広重の「大はしあたけの夕立」と「かめいどうめい亀戸梅屋舗」それに英泉の「はな魁花魁」である。広重の二点はいずれも「名所江戸百景」の名作と称賛されているものであるが、囲りは奇妙な漢字が装飾風に描かれている。「大はしあたけの夕立」は隅田川の新大橋の夕立を数人が傘を傾け急ぐ風景を俯瞰的に捉えたものであり「亀戸梅屋舗」は江東区の亀戸天神裏の梅屋敷を夕茜の中に梅の古木を大きく捉えた作品である。「花魁」は英泉の特異とする画材であるが、錦絵そのものを模写したものでなく、当時バリの雑誌の日本特集号の表紙に出ている英泉の花魁を模写したものである。ゴッホは錦絵の明るい色彩美、非写実的は内面美、大胆な線描と構図などを参考にしたものである。慶応三年（一八六七）パリ万国博に錦絵版画が多数出品されて西欧の印象派の画家たちに強い関心と呼んだ。印象派や新印象派の画家に強い影響を与えた錦絵は江戸下町に咲いた江戸の華である。



——ゴッホの模写
オランダ国立バン・
ゴッホ美術館所蔵——



——広重画
亀戸梅屋舗——

1694?

1618? 菱川師宣

1729

1664 鳥居清信

1686 奥村政信

1725 鈴木春信

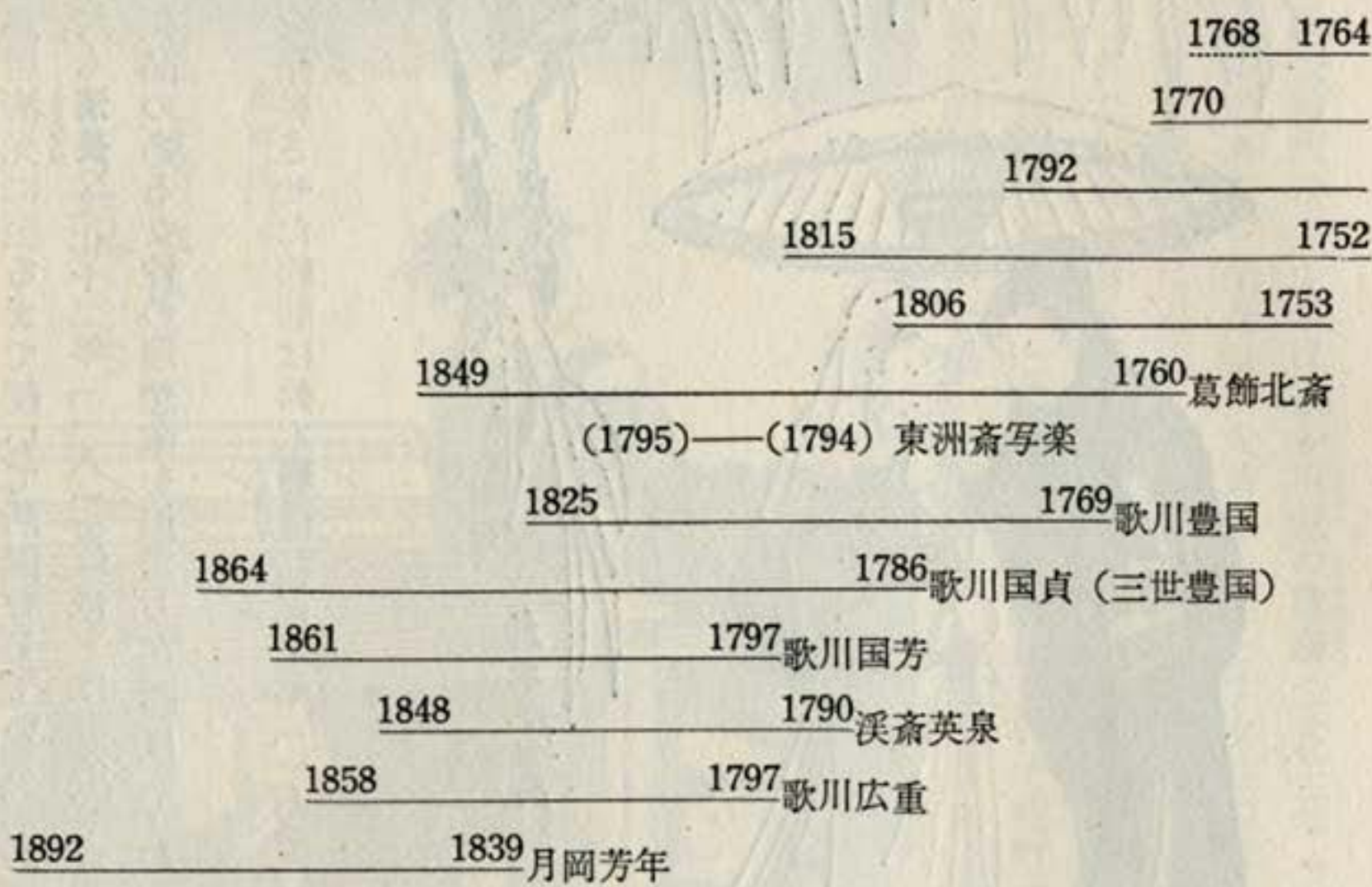
1726 勝川春章

鳥居清長

喜多川歌麿

—江戸錦絵の絵師年表—

一般に浮世絵版画というが、その黄金時代の多彩な色彩の版画をとくに錦絵という。錦絵は江戸下町に生まれた庶民の芸術である点に特色がある。肉筆画は画家個人の作品であるが、錦絵は絵師と彫師と摺師の三者一体で作成された芸術である。錦絵版画は一朝にしてできたものではない。最古の印刷である、天平宝字八年(七六四)木版印刷された法隆寺の百万塔の陀羅尼に見られるように、經典の木版印刷がその源流である。活字印刷のない頃、版木に文字を彫り手摺りにして数々の経文を印刷した。その後、經典、仏画などの木版技術が進み『伊勢物語』などのように木版絵入り本を刊行するようになった。この木版印刷技術が錦絵発展の原動力となった。当初の木版刷は黒摺くろずりといって黒一色である。つぎに丹絵たんえが発達し、黒摺の上に肉筆で丹(赤)やその他の色を彩色したものである。漆絵うるしえも同様に漆を塗って色彩を強めたものである。また紅絵べにえといってさらに紅の部分に漆を使用したものがある。紅摺絵べにずりえは初期の色摺版画であって、紅、黄、緑などの色を配したものである。明和二年(一七六五)の頃から始まった本格的な多彩な色摺版画を錦絵にしきえという。この多色摺りの錦絵は絵具も紙も良質とな



り、厚手の奉書紙を使い版木には朴と桜が使用され、とくに暖かい国の山桜がよいとされ、彫師の技術も進み毛髪一本一本が美事に彫られるようになり、これに伴い摺師の技術も進歩し、雲や波の濃淡などは摺師の技術に一任されるようになった。それらの繊細な技術は日本人の手先に適応したものである。多彩な錦絵は二十枚前後の版木を必要とする。毛髪などの細い部分は摩滅が早いので版木を新しくする必要がある。

つぎにそれぞれ優れた個性を持つ錦絵の著名な絵師を掲げてみよう。錦絵の元祖は菱川師宣（元禄七年「二六九四」没）である。師宣は遊廓もの、歌舞伎もの、名所記、風俗画に錦絵としての様式を確立し、多くの門弟が輩出した。ついで奥村派の政信（明和元年「一七六四」没）と西村派の重長（宝暦六年「一七五六」没）が活躍した。その頃から特異な画風の懷月堂一派があった。肉筆画が多いが大判版画も残っている。豊満大柄な肉体美人に特色があるがこの系列の画家は不詳な点が多い。その始祖は懷月堂安度（宝永正徳年間「一七〇四」に活躍）であるが絵島生島事件に連座して伊豆の大島に流された。また江戸歌舞伎の発展に伴い歌舞伎看板専門の家柄である鳥居派は

現在の鳥居清光に至るまで続いて活躍をしている。鳥居派の中でも清長^{きよなが}（文化十二年「一八一五」没）は有名、長身にして気品のある女性の理想像を追求した画風であった。

錦絵を発展させた絵師は鈴木春信^{はるのぶ}（明和七年「一七七〇」



鈴木春信画

——相合傘（春信画）——

没）である。抒情的な可憐な美人の風俗画を開拓した。笠森おせんはその代表作である。その系列に鈴木春重^{はるしげ}がいたが洋画家司馬江漢^{しばこうかん}（文政元年「一八一八」没）である。その他に文調派、宮川派もあるが、勝川派の春章^{しゅんしょう}（寛政四年「一七九二」没）が有名、門弟も多い。細田派の榮之^{えいし}

（文政十二年「一八二九」没）は絵師の多くが町人であるのに榮之は武家であった。

上品な女性像を扱った。北尾派の重政^{しげまさ}（文政三年「一八二〇」没）の弟子、政演^{まさのぶ}

（文化十三年「一八一六」没）は著名な江戸文学者山東京伝^{さんとうきょうでん}である。

安政六年（一八五九）五月から十か月間だけ活躍し、生没も人物もいまも謎に包まれている東洲斎写楽^{とうしゅうさいしやらく}の出現は、錦絵の白眉であるばかりでなく、わが国絵画史上、役者絵とくに大首絵^{おおくびえ}に見られる強烈な内観主義の表現力は、内外から絶賛されている絵師である。大首絵というのは顔の部分を大きく描いた作品のことである。

錦絵黄金時代のホープは喜多川派の歌麿（文化三年「一八〇六」没）である。全身画、大首絵を問わず女性の官能美、豊麗美を最高度に追求した絵師である。その作品は世界的にまで有名であるが、作品が幕府の忌避に触れ、入牢手鎖の刊を受けたことがある。歌麿について花町の女性を脳殺的に艶麗美を描いた菊川派の英泉（嘉永元年



——角田川（清長画）——

「一八四八」没）も有名である。ゴッホは英泉の「花魁」を模写するほどであった。

錦絵の一つの柱を築いたのは葛飾派の北斎（嘉永二年「一八四九」没）の出現であった。北斎の画の領域は広く、その上肉筆画、版本挿絵、漫画風版画等ゆくとして可ならざるはない。とくに「富嶽三十六景」は傑作であり、

その中の「凱風快晴」と「山下白雨」は彼の代表作として高く評価されている。北斎は九十歳の高齢になるまで活躍し、住居は九十四回も変えた奇人であったが、デッサン力もすばらしく新しい洋画手法を取り入れたりして激しい意慾を燃やした画家であった。北斎没後六年、安政二年（一八五五）パリの古本屋でブラックモンは「北斎漫画」を見て驚嘆し、日本に北斎ありを鼓吹したのである。

北斎に対して錦絵黄金時代を築いた一つの柱は歌川派の広重（安政五年「一八五八」没）である。歌川派には著名な

絵師が数多く輩出し幕末及び明治に至るまで活躍を続けた。広重は定火消同心じやうひけしどうしんの武家に生れたが、家督を譲って錦絵の世界に活躍した。広重ははじめ役者絵と美人画に力を発揮したが、風景画の「東都名所」で名をなし、以来「東海道五十三次」晩年の名作「名所江戸百景」のごとく気品ある風景画をもって一世に名を広めた。広重の

二点の作品をゴッホが模写するほど海外にまで名声を拍したのである。嘉永六年（一八五三）来日したペリーは日本を野蛮未開の国と思っていたが、広重などの錦絵を見てそのすばらしさに認識を改めたという。

歌川派は初代を豊国とよくに（文政八年「一八二五」没）というが三代豊国の国貞くにさだ（元治元年「一八六四」没）が有名である。



歌麿画

——扇屋花扇（歌麿画）——

国貞は亀戸（江東区）に住んでいたので亀戸国貞また五渡亭国貞という。芝居絵、美人画に力量を発揮し、挿絵画家としても活躍した。また長寿に恵まれ、錦絵の絵師の中で最多の作品を残し、その数一万点を越えた。歌川派の国芳くによし（文久元年「一八六一」没）は雄壮な武者絵で活躍し多くの門弟が出た。しかし江戸の錦絵は明治になって衰退し紅色のどぎつい赤絵の氾濫が流行し、技術面においても印刷技術に押され、洋風版画の発展に時代は移行した。

錦絵は歌舞伎、文学などにも影響を与えた。文久二年（一八六二）市村座で五世

尾上菊五郎らが初演した「白浪五人男」の「勢揃」の名場面名科白は有名であるが、これは五渡亭国貞の作品、役者見立絵の錦絵からヒントをえた河竹黙阿弥の戯作である。笑いを中心とした滑稽本、恋愛小説の人情本、伝奇小説などの読本、赤本、黒本、青本、黄表紙本など続々刊行されるようになったが、木版印刷であり、挿絵は

すべて錦絵の絵師によって描かれたものである。これらの挿絵が本の紙価を高めたのである。江戸時代公認非公認の艶本が大流行した。これは明治になって春本と称し、現在のボルノ雑誌であるがこれに枕絵の挿絵を添えたものが流行した。枕絵は枕草紙、春画といい、世界に類のない独特の春画として発展をし、錦絵の絵師たちが



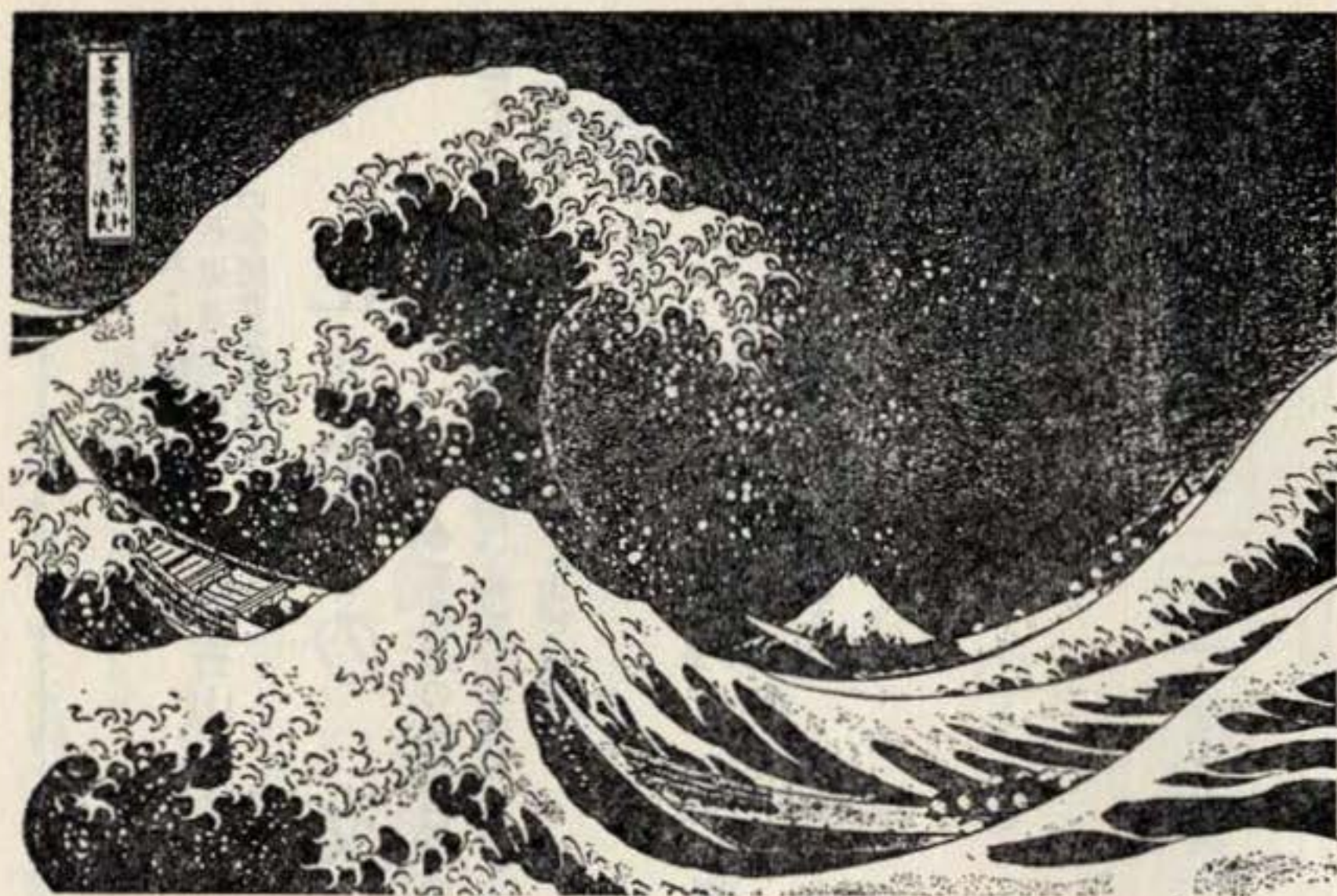
—奴江戸兵衛（写楽画）—

これを作成したものである。ただし絵師の名を入れてないのが立前である。枕絵や艶本は本屋が堂々と販売されたこともあるが、享保七年（一七二二）好色本禁令、寛政二年（一七九〇）風俗もの取締り、天保十二年（一八四一）再度取締令がでるほどであった。枕絵は海外にも流出し、またその名作といわれるものが海外に残されている。錦絵は江戸の千社札も盛んにした。

浮世絵は浮世すなわちこの世のことをありのまま描写した庶民性



——七世市川團十郎の菅丞相（国貞画）——



——神奈川沖浪裏（北斎画「富嶽三十六景」）——

の高い町絵師による風俗絵のことであり、とくに版画をさすのである。浮世は当時の流行語でもあった。錦絵とは浮世絵版画の多色刷黄金時代の版画をいう。天保八年（二八三七）の頃を頂点とする錦絵の多色刷印刷技術は世界水準を越えたものであった。江戸歌舞伎の発展とともに役者の錦絵が人気を拍し、江戸の花町の繁栄に伴い遊廓女性の美人版画が流行し、江戸の人口が集散するため江戸土産として江戸の名所または全国の名所の錦絵の需要が増し、著名な町人絵師が輩出して錦絵が黄金時代となった。この黄金時代を現出した絵師を七人に絞るとすれば、春信、清長、歌麿、写楽、北斎、広重、国貞と致したい。錦絵は江戸下町に発生した江戸文化の華である。錦絵は一世紀前から西欧において高く評価されてきているが、わが国では戦後から暫く見直され、高く再評価されだしたのは近年になってからである。

（つづく）

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟顧問
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 槩 宗 管 長

全日本煎茶道連盟会長

村 瀬 玄 妙 貌 下

装道きもの学院 理事長
装道礼法学院

山 中 典 士 先 生

■内容

一章 正坐の文化

二章 煎茶道の歴史と思想

三章 売茶翁に学ぶ

四章 茶道小論

五章 茶と旅

六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（〒二五〇円）

五 月 書 店

〒101

東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇二―四六三

海と山の狭間で

—木下空太郎に関する一考察—

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

伊東の市街を流れて海に注ぐ伊東大川の左岸、海を埋め立てて造成したなぎさ公園の一面に、木下空太郎の生誕百年を記念して、

浜^{はま}の真砂^{まさご}に文^{ふみ}かけば

また波^{なみ}が来^きて消^けしゆきぬ

あはれはるばるわが思^{おもひ}、

遠^{とほ}き岬^{みさき}に入^{いり}日^ひする。

という「海の入日」と題する詩を刻んだ碑が建てられてから、早いもので、もう二年近い

歲月が経つ。私はこの碑の除幕式には参列できなかったが、

杵太郎詩碑の除幕や秋の海

の句を献じて、ささやかに敬意を表した。私の好きな詩一つであったからでもある。市内に建立された杵太郎の詩碑としては第三番目の物であった。一つは母校のために作った校歌が西小学校の校庭に、もう一つは伊東駅の真裏の高台にある伊東公園に、「むかしの仲間」を彫ったのが、昭和三十一年に建てられている。それにしても、伊東が生んだ不世出の文化人を顕彰するのに、生誕百年という節目を待たなければ、詩碑一つ建てられなかったとは、思えば情けない話ではある。しかし杵太郎の業績そのものが忘れられかけているのも亦事実である。詩碑の建立を機に再評価されるかと期待したが、いまのところ、その動きは全く見られない。

木下杵太郎こと太田正雄は、明治十八年（一八八五）八月一日、静岡県智茂郡湯川村（現伊東市湯川二丁目）に生まれた。生家は「米惣」という米穀や呉服雑貨を手広く商っている商家で、上に四姉二兄がいた。父惣五郎は進取の気象に富んだ人で、交通の便は船だけという陸の孤島であった伊東に、いち早く東京や横浜から文明開化の風を将来している。杵太郎が「石竹花」序で、「ある日の夕、^{ゆふべ}暇乞にと縁者の家を訪ね、其家の老女から昔話をきいた。東京からそう遠くもない港へ押送（^{おしおくり}帆を使わない櫓漕ぎの舟＝筆者注）が入って、学問好きな人の家に『窮理問答』『世界膝栗毛』『学問のすすめ』などが齎（^{もたら}）され、『当世女房気質』『北雪美談』の並ぶ本棚を占領し」云々と記している学問好きの人の家が『米惣』

で、ここには書かれていないが、化学に関する書籍や耶蘇教関連の書も購入されていた。

杵太郎は二歳の時、長姉よしの養子になっている。養父は太田家を継いだ大井太市（改め太田惣兵衛）で、翌年実父惣五郎が死去してからは、惣兵衛を父、よしを母と呼んで成長している。「石竹花」序にはまた、「予に最も深い印象を与えたものは耶蘇教の伝来の沿革である。初めは小さい家に日曜日の夜毎に紅い十字の提灯が点された。それが廃れたころには怪しい、一人の男が寐しい村道に立って夜々、辻説法をした……」と書かれているから、杵太郎が物心ついたところ、「米惣」では宣教師を招いて、日曜学校のようなものが開かれていたのかもしれない。後に、杵太郎が南蛮趣味の詩を書いて文壇に登場し、更に吉利支丹に心血を注いだ萌芽を、私はここに見る思いがするのである。

太田家には、田舎の旧家にしては珍しい自由闊達の気が漲っていた。それは多分に父惣五郎の気象が齎したものであろう。杵太郎の姉や兄もそれぞれ東京や横浜に遊学している。これは当時としては、稀有の事であったに違いない、「文学芸術に対する愛は、やはり或る遺伝的な素材と境遇とにもとづく。年の関係のやや違う予の姉・兄たちにも、そういう素質があった。（中略）東京或いは横浜から毎夏帰省する姉たちは、薄暮の海岸で英語の歌をうたって聴かせてくれた。予の異国情緒はこの時育まれた」と、杵太郎自身「我々の通って来た時代」という文章に書き遺しているように、杵太郎少年は恵まれた環境の中で、古い江戸の文化と新しい明治の文明を吸収する傍ら、海に潜り山野を跋涉する自然児として成長した。そして少年の志すところは、画描きか文学者であったという。しかし太

田家では医者にする事を考えて、中学からドイツ語を教える東京の独逸協会学校（独協中学）へ入れた。明治三十一年（一八九八）十三歳の時である。父惣五郎が生きていたなら、という思いが少年の胸をよぎらなかつたとは言ひ切れまい。しぶしぶの上京だったが、これは野に虎を放ったようなもので、在学中から文集「地下一尺」に筆を染め、これが親の知るところとなつて、大叱責を蒙ってしまった。その文集がどんな物であつたか、いまとなつては知る由もないが、親の目をくりますために使い始めた木下杢太郎という筆名は、文集に収められた詩の主人公の名に由来すると仄聞している。

明治三十六年（一九〇三）十八歳、第一高等学校入学。このころより三宅克巳に絵を学ぶ。同三十九年二十一歳、東京帝国大学医科大学に入学、翌四十年、与謝野鉄幹が主宰する「新詩社」の九州旅行に吉井勇、北原白秋等と参加。この旅から帰つて、「明星」に異国情緒豊かな詩を発表するや、耽美派の旗手として一躍脚光を浴びた。殊に特異な語彙を駆使した南蛮調は、白秋等同世代の詩人に多くの影響を与えた。四十一年、「新詩社」を脱退して、白秋、高村光太郎、画家の石井柏亭等と「パンの会」を興す。自然主義に反抗して新芸術主義（耽美主義）を展開するための旗揚げで、医学界の泰斗森鷗外の知遇を得たのもこの年であつた。四十二年、「パンの会」の面々と「スバル」「屋上庭園」を創刊。四十二年医科大学卒業。後に、「一九一〇年は我々の最も得意の時代であつた」と述懐しているように、文運は隆盛を極め、大正五年三十一歳で南満医学堂教授兼奉天医院皮膚科部長に就任するまでの六年間は、詩のみならず小説に戯曲に美術評論にと幅広く健筆を振るつ

ているが、渡満後は殆ど筆を折った恰好となつて自ら耽美文学の旗手の座を降りている。本業が忙しく、文筆に親しむ暇がなかったのであろうが、やるべき事はやったという思いが、彼にあったのかもしれない。その辺の事情を忖度して、白秋は大正八年に上梓された空太郎の第一詩集「食後の唄」の序に、次のように記している。「彼は比類稀な詩境の発見者であつた。ただ惜しい事にはあまりにその効果を整理為ようとはしなかった。彼の逐次の新発見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。だが彼はただ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に勿体ない程複雑は複雑のままに、美は美のままに、ただ燦燦爛爛と取り散らされてあつた」と。

大正十一年（一九二二）「癩風菌の研究」で医学博士となる。欧米留学後、十三年愛知医科大学教授、十五年東北帝国大学医学部教授、昭和十一年（一九三六）東京帝国大学医学部教授を歴任し、皮膚糸状菌、レプラ、皮膚腫瘍等に関する研究は国際的にも高く評価され、昭昭十六年、フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を授与されている。当時の世界情勢を考えると、稀有の事と言わねばなるまい。稀有の事と言えば、戦争最中の十八年、中央公論社から「日本吉利支丹史鈔」が刊行されている。紙が統制下に置かれていた時代に、キリスト教に関する書物がよくぞ、という思いがする。このころから、空太郎は「白花譜」と名付けた植物写生を始めている。心慰める物と言えば、路傍に咲く雑草の花ぐらいしかなくなった時、絵描きになりたかつたという少年の日の夢が、空太郎の心に甦つたのであろうか。八七二枚にのぼる画稿の殆どは、横野の医学用箋に描かれている。伊

東の生家で療養中も百枚以上の絵をものしているが、絶筆は二十年七月二十七日、「胃腸の痛みで家で臥していた。安田比留間がこの花を持って来た。これを写す。運勢たどたどし」と添書された山百合であった。添書の筆勢の弱りが痛々しい。

木下杢太郎は、この年十月十五日、東大付属病院柿沼内科で六十年の生涯を閉じた。胃癌であった。

実を言うと、この稿では詩碑に彫られた詩文の改竄を問題にするつもりであった。紙数も尽きたので略述すると、どこでどう間違ったのか、碑には「あはれはるばる我おもひ／遠き岬に入日する／」と刻まれているのである。傍点の部分の違いと句読点を省いたのは何故か、理解に苦しむ。文学碑の場合、特に入念に考証して、原文に忠実に写して貰いたいものである。それにこの詩は伊東の海を詠った物と単純に解釈されているが、これは大間違いである、東側に海が開け、西に山を背負っている伊東では、遠き岬の入日は見る事はできない。後に書き加えられた二九七字から成る序文が混乱を生んだのであるが、

八月は、遠き岬の

漸に暮れ、小き灯のかげ

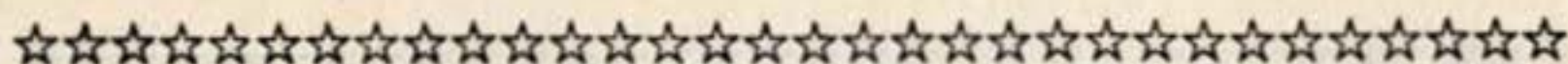
一つ二つ殖えてゆくごと、

昨日一つ、今日また二つ、

落花生、黄なる花咲く。

（「落花生」）

の方が、海に臨む公園には、よりふさわしかったのではないか、と私は思っている。



立ち止まる左善導

〈38〉



寺内大音

挿絵・松 濤 遠 文

不老不死

四

皇帝高宗の健康は年とともに衰えていった。はっきりした病名を医師団は付与し得なかったが、たえず目眩（めまい）におそわれ、骨痛や痺れに悩まされた。

こうした病状におち入ったとき、当時は何ものかの「たたり」のせいにするのが常識であつた。

「玄奘和上のたたりによるものかもしれない」

と高宗は兩人だけの席で妻の則天武后に告げた。玄奘和上が、インド西域へ旅しておびただしい經典類を持ち帰った玄奘三蔵だった

ですよ。しかも陛下はお身体が悪い。ここで
妄が老いこんでしまったら、誰が陛下のお世
話をするんですか」

「……」

「妄はいつまでも若くしていなければなりま
せん。その若さを保つために貴郎が必要な
です」

頸へまわした腕に力をこめ、自分ともども
寝台へ倒れこもうとする。王徐明は必死に腕
の輪をくぐり抜け、武后から離れて床に立っ
た。

「天后さま、いけませぬ。今宵限り、きつば
りとの地獄からぬけ出ましょう」

「地獄ですって！」

見上げてくる則天武后の眸に鬼火のような
妖光が点ぜられた。

「地獄です。どちらにも救いのない愛慾の炎
で焼きつくされる地獄ではありませんか」

「徐明や、この部屋がどこだかおぼえていま
すか」

「この部屋……」

「貴郎が未だ門下省の吏生だったころ、沢山
の女を殺したでしょう。首を絞めて」

「ああ……」

「たとえ命令だったにせよ、殺した事実には
変りはありません。殺害した部屋はとりこわ
されたけれど。この辺りがその跡なのよ」

「……」

「殺された女の悲鳴や顔をおぼえているでし
ょう。忘れるはずがないわね。地獄の声よ、
地獄で悶える女たちの顔だわ」

「……」

「地獄をたっぶり見てきた貴郎ではありません
か。今更、善人みたいな顔ができるんです
か。貴郎の身体にはべったりと女の怨念がこ
びりついているのよ。それをぬぐい取るに
は、こうするしかないわ」

再び武后は太い腕を王徐明の頸へまわして
きた。一、二歩あとじさってみたが、それも
空しい抵抗であった。いつか王徐明の肉体は

「駱駝の腰骨だそうですね」

「この液汁は？」

「沙漠の泉のほとりにある樹の幹をけずってしぼり取ったものだそうです。長年にわたってこの腰骨に浸たしてあるので、駱駝の脂肪（あぶら）をすっかり吸いこんでしまおうと言われます」

「西突厥の陣営から將軍が届けてきたということだが……」

「寧朔大使がもたらしたものです。ただ徐明さん、一つ気がかりなことがあります」

「何だね」

「寧朔大使の貢ぎ物である点は間違いないのですが、届いたのはだいぶ以前で、王后はいったんこれを崇儼先生へ御下賜になっているのですよ」

「あの厭勝師にか」

「洛陽城内のお宅に飾ってあるのを見かけたことがあります。これは何ですか、と訊いたら沙漠の夜を楽しむ秘薬だとおっしゃいました」

た

少年は早熟の戯れ口を叩いた。その実体を知っているのかどうか。

厭崇儼が則天武后の愛寵を一身に受けていたころ、閨房の悦楽を倍加させるために与えたものにちがいない。

それを今更、「新薬」として此処へ持ちこんで丹薬を混入させて高宗皇帝に服用させようというのである。

「それで、天后はそのことをお忘れなのだろうか」

「さあ……容れ物は一緒でも中味は変わっているとおっしゃいました」

「なにつ、中味は違うんだと。でも何とかいう沙漠の樹液の名を口になされていた」

「エクリプタ・プロスクター——」

「それに違いはないでしょうが、以前に崇儼先生に与えたものでないことだけは確かですね」

「となると、あの厭勝師が別な薬を献じてき

たこともあり得るわけだ。同じ容れ物にみたして」

「それなんです。崇儼先生はあせっていらっしやいます。以前の地位を貴郎に奪われたわけですからね」

「奪うつもりはなかったが、成りゆき上そうなってしまった」

「何かを企んでいる」

「企らむとしたら何だろう。これをモトにして丹薬をつくり、天子さまに差上げるのだぞ」

「毒殺……それも自分の手をわずらわさずに」

「そんなことって、あり得るだろうか。天后が共謀して」

「わたしも無いと思います。王后は如何なる場合でも陛下を愛していらっしやいます」

「そうだろうなあ」

王徐明は複雑な相槌を打たないではおれなかった。自分との愛慾に狂う則天武后、あれ

は何であろうか。身体だけが自分にモノ狂っているのだろうか。心は絶対に皇帝から離れようとはしない。

「ただ崇儼先生はこんな言葉を洩らしましたよ。冗談めかしてはいましたが」

「どんな話だね」

「天帝が王位を賢太子に御譲位になる。すくなくともそんな意志をお洩らしになれば、王后は賢太子を除くために何らかの手を打つであらうとね」

「ねらいは賢太子だったか」

「王后自身がそれを企らむのではなく、企らんだように誰かが見せかけるということではないでしょうか」

「王后をおとし入れるためにかね」

「すっかり王后から遠ざけられた崇儼先生としては、城内の反王后勢力に頼ってゆくのではないのでしょうか」

「弘太子に仕えていた人々かね」

「とも言えますね。どこの誰とは名指すこと

ができませんが」

少年はまるで十歳も年上のような口をきく。生まれてこのかた宮廷内の修羅場を目撃してきた憚良が自然と身につけた智恵である。

「おお憚良や、これをどうしたらいいのだ」
駱駝の腰骨を差し上げながら王徐明はするような眼で少年を見た。

「どうするって……」

「誰がどんな企らみをしようとも丹薬をつくるのは所詮わたしだ。わたしは誰かと一緒に毘にはまりこまねばならない」

則天武后との不倫がすべて暴露されて、姦夫姦婦として「腰斬ノ刑」に処せられるおのれの姿が臉をふさいでひろがった。

「徐明さん、出かけましょう」

「出かける？ どこへ」

「善導和上にどうしたらよいか、道をお示し頂こうではありませんか」

「おお、善導和上」

「きっと正しい生き方を教えて下さいますよ」

「和上はいま終南山か」

「いいえ、この街にいらっしゃいます」

「街にいらしたのか」

「はい。實際寺の浄土院で、病んで臥せっていらっしゃいます」

「何だと、病んでいらっしゃると……知らないだ。なぜ知らせてくれなかったのか。すぐお見舞いに参上したものを」

「わたしとてつい昨日、西明寺へ立ち寄った折、聞きつけたばかりなのです。未だお見舞いする暇はなく、どんな病状かも存じておりません」

善導は決して頑強な体質ではなかった。重病にこそかからないが、若いときから無理のきかない身体だった。つよい精神力と慎重な摂生で修業生活を保持してきたのである。すでに六十路の坂を大きく踏み越え、頑強ではなかった体質に自然の老化がおとずれたので

あろう。

「實際寺の浄土院か」

王徐明は懐旧の思いを深めないわけにはいかない。善導と初めての出会いも此処だったし、貧窮の書方家は紙を需める資がなく、柿の葉に書きつけて唐政庁に認められるきつかけをつくった。名書家魏徴の知遇を得たのだが、彼の政治的つまづきがそのまま王徐明の運命をねじ曲げた。田舎の方士となり、中央へ返り咲けば女権力者の肉慾の餌食になるという現状である。そして再び振り出しの實際寺へ出かけていって、善導に教えを請おうとする。

「これから出かけよう」

「こんな刻限にですか」

戸外は闇に包まれかかっていた。

「道を聴くのに夜も昼もあるまい」

と突き放したが、本音は一夜といえども恐ろしかった。今宵もまたあの武后が忍んでくるはずだった。脂肪でぎらついた女肉で締め

つけられたら、判断がどう狂ってゆくか、王徐明にも自信が持てなかった。

二人は王城をぬけ出ていった。

六

病んだ善導。しかし仰臥してはいなかった。深更へ及ぼうとするのに燈芯をかきたて机に向って、しきりと書き物に熱中していた。ちょっと不自然なのは、背中の部分に大きを道具箱をあてがっていることだ。

「おやすみではなかったのですか」

王徐明の問いに、

「横たわると、そのまま起き上がれなくなりそうなので、こうしているのです」

力なく善導は微笑んで答えた。

「何をお書きになっているのですか」

「往生礼讃偈です。以前に作ったもので、衆生が浄土を求めるように勧めた韻文です。と

きしめようとするからです。いわんや、その怪しげな丹薬を用いて毒殺の具に供しようとする。誰がどのように利用するかは問題ではありません。詮索しているうちに、その泥沼へ貴郎自身が足を奪われてしまうことでしょう」

「では和上、どう対処したらよろしいのでしょうか」

「捨てることです。捨て去ることです」

「丹薬をつくることを放棄して、王城を去るのですか」

「それが出来ればよろしいが、貴郎の立場上は、それになりますまい」

「はい、すぐさま追っ手がさし向けられるにちがいありません」

「徐明さん、こうしたらどうですか。その沙漠の樹液とやらを捨てて、無害無益な果実の液にでも替えたらどうですか」

「果実の液にですか。丹薬の粉薬を混ぜよと命じられたら、どうしましょうか」

「それも無害無益な米の粉でも混ぜておきなさい。これこそ不老不死の妙薬だと信じこんで服用したがる人には、そのまま飲ませておけばいいではありませんか」

「何事もおこらない」

「そのとおり。毒殺もなければ不老不死でもない」

「わかりました。そうすることにします。それから和上、王后との関係は？」

「いつか観無量寿経の仏身観についてお話したと記憶しますが、聖なる仏身の男根は見事な恰幅をお持ちです。しかし、煩惱で濁った眼にはこれをとらえることができない。下腹部の底へはいりこんでしまつて見えないのです」

「それは、どういうことを意味しているのですか」

「機能として不備ではなく、健全逞ましい男根であるが、すぐれた知性がこれを抑制して淫らな視界からは消え去ってしまう。貫郎に

女体が迫ったとき、その男根が消え去れば欲望の行為は成立しないことになる」

「ああ、わたしはいつも嫌悪の念に包まれて、行為を不能にするのですが、彼女はあらゆる技術を駆使してきます。そして、わたしはそれに負けてしまいます」

「貴郎に聖なる仏の完璧さを求めるのは無理にしてもそれへ近づく努力はして欲しいと思います。智慧を磨き、同時に信心を深める以外にありません」

「善導和上、わたしにはその信心の点で未だ不徹底なのです。方士なぞという邪道へ迷いこんでいるからです」

「たった今から阿弥陀仏一身を信心なさることです。決して遅くはありません」

「この憚良についてお念仏に励むことにしましょう」

「そうなさるがよろしい。必ずやいま貴郎が惑溺している泥沼から脱出できることでしよう」

そこで善導は机上の紙へ向いなおして、さらさらと筆を動かした。

「これを差し上げる。これからの修業で、くり返し読んで下さい」

新しい偈を書きおろしてくれた。

仰惟釈迦此方発遣、弥陀即彼国来迎。彼喚此遺豈容不去也。唯可勤心奉法畢命為期、捨此穢身即証彼法性之常樂。

「これは？」

「わたしが釈した観無量寿経疏からの引用です」

と善導は字句の説明へはいった。

(つづく)

舞見御中

埼玉工業大学

松川文豪

淑徳中学校長

淑徳高等学校長

里見達人

〒174 東京都板橋区前野町五―一四―一

鎮西学園理事長

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺三―一―一

東山学園長

石井俊恭

〒606 京都市左京区永観堂町五一

上宮学園

理事長・学園長 鵜飼隆玄

高等学校長 鵜飼光順

〒543 大阪市天王寺区上之宮町三―一六

神田寺（旧法禪寺・安良寺）

学校法人 真理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三―四―一〇

電話（〇三）二五一―八六八三、五

法然上人降誕聖地

美作誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話（〇八六七二）八一二二〇二

浄土宗教学局長

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺

慈光ビル（〇二七三）二三―四〇〇〇

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八

大原山 西福寺

鵜飼隆玄

萩市 常念寺

住職 古本光然

老隠 古本超然

華陽院住職

堀田良謙

〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八

舞見御中署

龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二二五一	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六一五	遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―一二四七 廣隆寺内
新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目	大松寺住職 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四―一―三八	祐天寺住職 巖谷勝業 〒153 目黒区中目黒五―二四―五三	お骨仏の寺 一心寺 貫主高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七二―〇三七二(代)
光運寺住職 飯田信弘 〒510 四日市市中部三―一二二	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町二―一―二	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	光心寺 北山良祐

舞見御中

法然上人二十五霊場
第二番仏生山法然寺

細井俊明

伝通院住職

吉川哲雄

〒112 東京都文京区小石川三―一四―六

岩手教区教化団長

圓光寺住職

加藤順底

〒020 盛岡市南大通三―二―四九

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二―一三―一八

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部光順

電話(〇三)八一―一三三七二

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

群馬教区長

野口善雄

〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺

西住院

戸川靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二三―四

電話(〇二八二)二二―一〇八〇二

芳泉寺

柳楽真純

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん

〒386 上田市常磐城三―七―四八

光明寺住職

白幡憲佑

〒232 横浜市南区庚台六六

〒440 豊橋市関屋町二二二

悟真寺

住職 立松 辨成

電話(〇五三二)五二―五五六六

舞見御中署

浄土宗宗議会議員

伊東 康雄

龍泉寺住職

本山光明寺執事長

西念寺住職

北邨 謙順

〒250-02 南足柄市沼田三一五

回向院住職

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二一八一〇

稲田 稔界

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄心寺

小池 政雄

称名寺住職

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八一四

電話(〇二三八)二六一五二二五

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二二二六―三八

教安寺住職

野呂 幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六一二

電話(〇四四)二二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口 徳正

松庵寺内無為窟主

小川 金英

〒025 花巻市双葉町六一四

仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―二二

正覚寺住職

楠美 知行

サンガ真仏教舎本部会長

大善寺住職

裏辻 賢洲

〒82-133 福岡県宗像郡福岡町松原区

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進に努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 八月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年七月二十五日 印刷

昭和六十二年八月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

舞見御中

総本山 知恩院 門主 藤井実応	大本山 増上寺 法主 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稻岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺	大本山 光明寺 法主 藤吉慈海	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光
〒170 東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一 大正大学 電話(〇三)九一八―七三一―代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一―一二四―代表 通信教育部 四九一―〇二三九	学校法人 大乘淑徳学園 淑徳短期大学 理事長 長谷川良昭 〒174 東京都板橋区前野町五―三一―七	京都文教短期大学 学長大橋俊有 〒611 宇治市槇島町八〇